

高温予報に伴う営農技術対策

平成24年8月31日
北海道農政部

札幌管区气象台が8月30日に発表した気象情報によると、今後2週間程度、この時期としては顕著な高温の日が継続する見込みです。

つきましては、以下の技術対策を参考に、適切な栽培管理に努めてください。

第1 馬鈴しょ

軟腐病の発生に注意し、茎葉に発病を認めたら直ちに薬剤散布を開始する。

収穫した馬鈴しょは、高温状態では場に放置せず、緑化し難い冷暗所でキュアリングを行う。

第2 てんさい

褐斑病の発生に留意し、防除ガイドに準拠して防除を継続する。特に連作ほ場では発病が急激に進展する場合がありますので注意する。

第3 野菜

1 施設管理では、葉やけ、着果不良、日焼け果、石灰欠乏症状などの高温障害に注意する。そのため、側窓、妻窓、天窓や換気扇等を活用して換気に努めるとともに、かん水管理を適切に行う。

遮光資材を積極的に使用し、施設内の温度を下げ、生育適温の確保や作業環境の改善を図る。

ただし、栽培品目に応じて遮光率を選択するとともに、曇天時の被覆は避け、過度な遮光にならないように注意する。

2 露地栽培においても、石灰欠乏症状などの生理障害が発生しやすくなる。カルシウム資材の葉面散布や可能な限りかん水を行い土壌水分を確保する。

3 トマト、きゅうり、ピーマンなど果菜類は、高温や株の消耗により落花が多くなるので、生育や気象条件に合わせた適切なかん水と追肥、葉面散布を行う。また、株の負担を軽くするため、不良果の早期摘果を行う。

4 かぼちゃは、うどんこ病などの発生により枯葉が多くなると、日焼け果の発生を助長するので適切に防除する。

5 たまねぎの根切り作業は、高温あるいは日射の強い日は、球の日焼けや高温障害が発生しやすくなるので避ける。

6 高温期は収穫後の鮮度や内部品質が低下しやすいので、朝夕の涼しい時間帯に収穫する。また、収穫物をほ場に長時間放置せず、速やかに倉庫や予冷库に搬入する。

7 病害虫の防除は、使用基準を遵守し、薬害の出やすい日中の高温時を避ける。

第4 花き

1 施設管理では、天候に留意しつつ積極的な換気や遮光・遮熱資材等の活用によって植物体の温度低下を図る。また、曇雨天時には過度な遮光を避けるとともに多湿防止のため施設内の空気循環を行うなど適切な温度と湿度の管理に努める。

2 切り花は開花が進みやすいため、採花は涼しい時間帯を選び適切な「切り前」で行う。

3 採花後は品質低下が早いので、迅速な水揚げや保鮮処理を適切に行う。選花調製、保管や輸送は低温条件に努めるとともに、北海道切り花統一出荷規格を遵守して出荷する。

第5 家畜飼養

1 畜舎の換気

暑熱ストレスは、乳牛の産乳能力を著しく阻害する。牛床から1.5mの高さに乾湿計を設置し、体感温度計算表によりストレス程度の把握に努める。乳牛は体感温度が20℃を越えるとストレスを受けはじめ、25℃以上になると生産に大きな影響を及ぼすようになる。密飼いを避け、敷料の交換を早めに行って湿度を下げ、畜舎の状況に応じた換気に努める。

- (1) 窓、戸等はできるだけ開放し、舎内の換気を良くする。横臥時の家畜の体表面の風通しを良くするため、壁の下部に換気口を設置した事例などがある。
- (2) 換気扇やダクトファン、トンネル換気等を効果的に利用し、舎内の通風や換気に努める。ダクトからの送風は頸部、肩後、肩上部に当たるようにすると効果的である。なお、トンネル換気は窓や天井などの破れがあると、気密性が低下し、換気効率が低下するので注意する。

2 庇陰と給水

- (1) 庇陰林のない放牧地への放牧は、朝晩の涼しい時間帯に行う。
- (2) 畜舎、フリーストールに寒冷紗などを設置し、直射日光をやわらげる。
- (3) 気温が高く、強い日差しにさらされるパドック内に、乳牛を長時間とどめない。
- (4) 新鮮な水がいつでも十分に飲めるように給水器の点検整備に努める。

3 栄養管理

- (1) 採食・消化による牛体の熱発生や体温上昇を防ぐため、嗜好性と消化性の高い良質飼料を多回数給与し、採食量の維持あるいは回復を図る。
- (2) 飼料全体の栄養バランスを取り、塩やミネラル類の補給に努める。

4 家畜管理

- (1) 暑熱に伴う体力の低下により、乳房炎をはじめとする疾病が増加しやすい。乳牛の挙動、飼料の食い込み状況などを細かく観察し、異常牛の早期発見と処置に努める。
- (2) 暑熱時は発情行動が不明瞭になりやすい。飼養環境を整えるとともに、頻繁な観察により確実な発情発見に努める。

5 サイレージの二次発酵、飼料の発熱抑制

- (1) サイレージ取り出し面は、なるべく平らな状態を保ち、取り出し後はその都度シートで被覆する。
- (2) TMR調製後は速やかに給与する。
- (3) 飼槽に残った飼料を除去してから新たに給餌する。ミキサー車内には飼料を残さないよう注意する。
- (4) 二次発酵、TMR飼料発熱抑制のための各種添加剤等の使用に当たっては、各資材の推奨使用法をよく確認する。

6 乳質

- (1) パイプラインやバルククーラなど、搾乳器具の洗浄・殺菌を徹底する。特にコックなど突出部分の洗浄を徹底する。
- (2) バルククーラのスイッチの入れ忘れがないように注意する。また、バルクの乳温管理を徹底する。

第6 農作業

1 暑さ対策

- (1) 余裕を持った作業計画を立て、気温の高い時間帯は屋外作業を外すなど工夫する。また、ハウス作業は、日照により気温が大きく変化するので、体調がすぐれない時や高温時は、ハウス内作業を避ける。
- (2) 熱中症防止や疲労回復のため、定期的に休息を取り、水分補給に努める。また、汗で失われた塩分の補給(スポーツドリンク、水と梅干し、0.1~0.2%の冷やした食塩水)を行う。

- (3) 通気性や吸湿性の良い生地による涼しい服装で作業を行う。また、保冷材を首もとに当てる等、身体を冷やす工夫をする。
- (4) 屋内作業場では、断熱材の施工や遮光することで室温上昇を防ぐとともに、風通しを良くして体感温度の低下に努める。
- (5) 睡眠と栄養を十分にとり、疲労の蓄積を防ぐ。

2 農薬散布作業の適正化

- (1) 気温が25～30℃以上となる高温時の散布作業は、噴霧した薬液の蒸発により散布量が減少し、作物に対する薬害の危険性が增大すること、散布者の健康被害が懸念されることから、なるべく避ける。
- (2) 暑い時期であるが、農薬の調製及び散布作業中は、防除衣、防除マスク、ゴム手袋、眼鏡等を着用し、身体を防護する。また、体調不良の場合は散布作業を控える。

お問い合わせ先：食の安全推進局技術普及課（電話011-231-4111 内線27-823）